



梅堂國政画

尾田彫秀

前嶋和彌補綴

伊東真三者

水錦岡田曙編 第二

金松堂梓

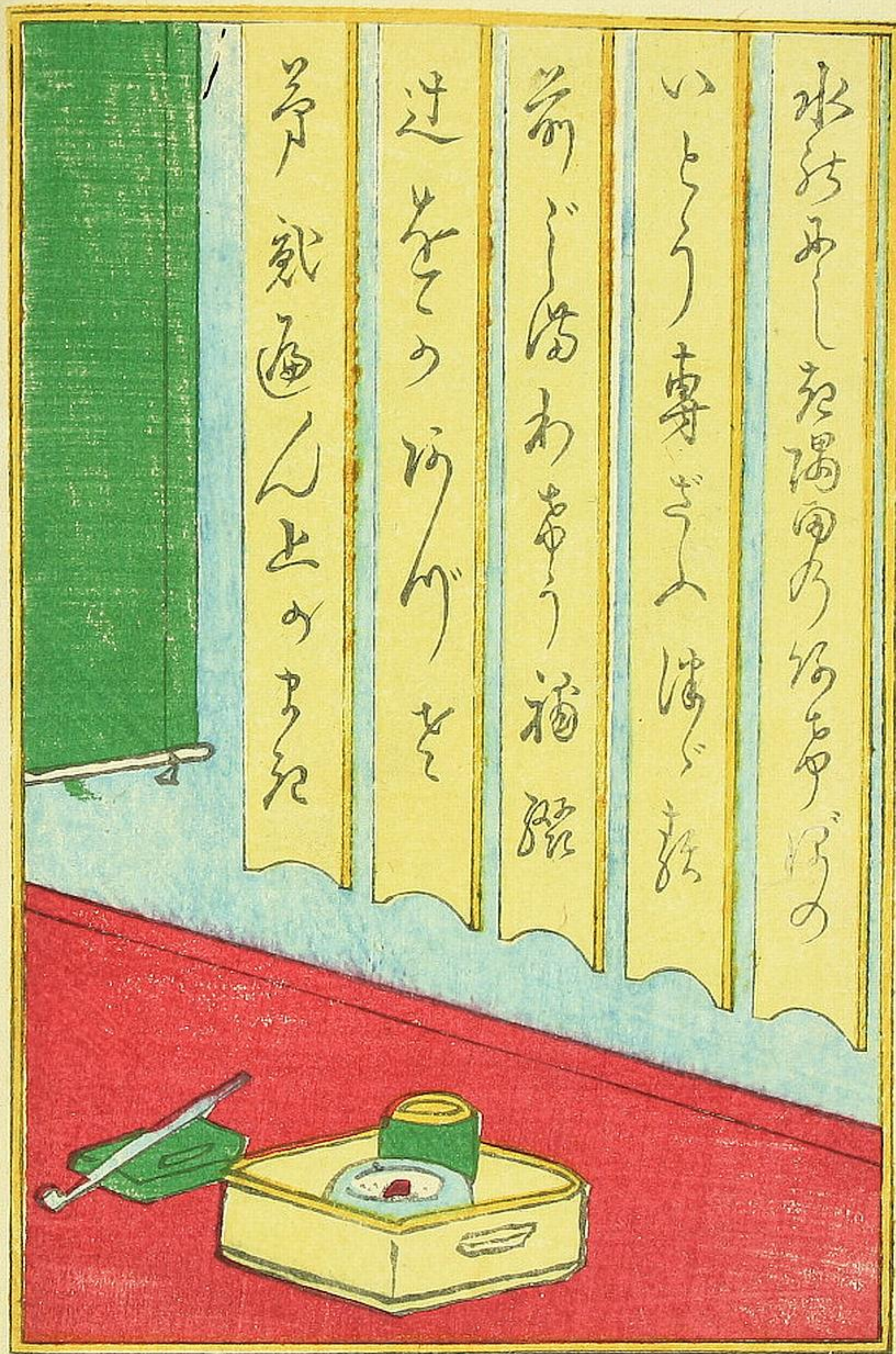
下

中

上

10 15 20 25 30 35 40 45





水たみした陽向のなをりほの  
 いとくうし専ぎふはるが話  
 前じはあさう福際  
 辻をさう所がを  
 予ん或通んとゆふた

水錦隅田曙第二編自序

曩の物せし水の錦の書房が需は應せしまふく耻るやう  
 き所業なると。初篇の筆と採しものころ。我面白の入喧し  
 具眼の方を云へを更なり。幼児女もろい遣り捨らま。  
 水野の流と絶果る。隅田の塘の長々と。言の葉草の繁  
 るふみちと。吾儕の愚筆と顧を居りし。僥倖ありて  
 愛顧と賜り。後の如何ぞ二編の出げやと。陸續仰せり有  
 難しと。書房の特は雀翻なり。嗣編と書糸の注文は嬉し  
 まふみ気も来て。夜延仕事は禿筆押採り。先づ此稿を果せし  
 と。腹の打幕うち開て。序文めらうしと。言を述る

明治十二年己卯五月

橋塘伊東専三





再出  
藝妓

おきん

録田

庄次郎

本名



片瀬

六三郎

尾張屋

喜右衛門



○田原  
三次郎

○山田  
作兵衛

二編上の巻

備もあまの腰に  
 袂えぬく衣を  
 とまての方も  
 ぬが吉郷の平井村へ  
 秘したる替り七の身と  
 君をんといふも  
 もりぬた小村舟村  
 まをすし知度面  
 ありぬ者か六人  
 現はとて各自抜刀を閃く威し文  
 白と黒と一之香とのひるべ切拵人勢ひのあはれ  
 まく懐中の金と百と渡りやりを揚を腹とて



▲平井村の知己の家へ能とあめまきと何まき  
 とあふまきまふらまきと何まき何まき  
 其と何まき掛るまきまきの何まき  
 と何まき何まき何まき何まき

ついでにひまもてよ夜  
 初め初所ふりつる色と  
 優りてそとへそ附け  
 枝とありてかぬ部よ  
 孫へた美體をまぶか見  
 のゆきをくまなく除け  
 の後乃もまたたてき  
 成早がま面員  
 着まはる麻らしくよ  
 香も掛はらけと思ひ  
 るがくも一年をうり添加  
 く月日へまふらう備  
 ちとて候ふ人由まき中



六  
 会撮そ来  
 とつてさう  
 とつてさう  
 田舎内



近村の村六言部がひまも  
 衣のの襟六言部がひまも  
 深く急著は太米様との  
 料理を毎日のやうに  
 て海宴の餘はと居世流  
 由先や角と挑掛るよ

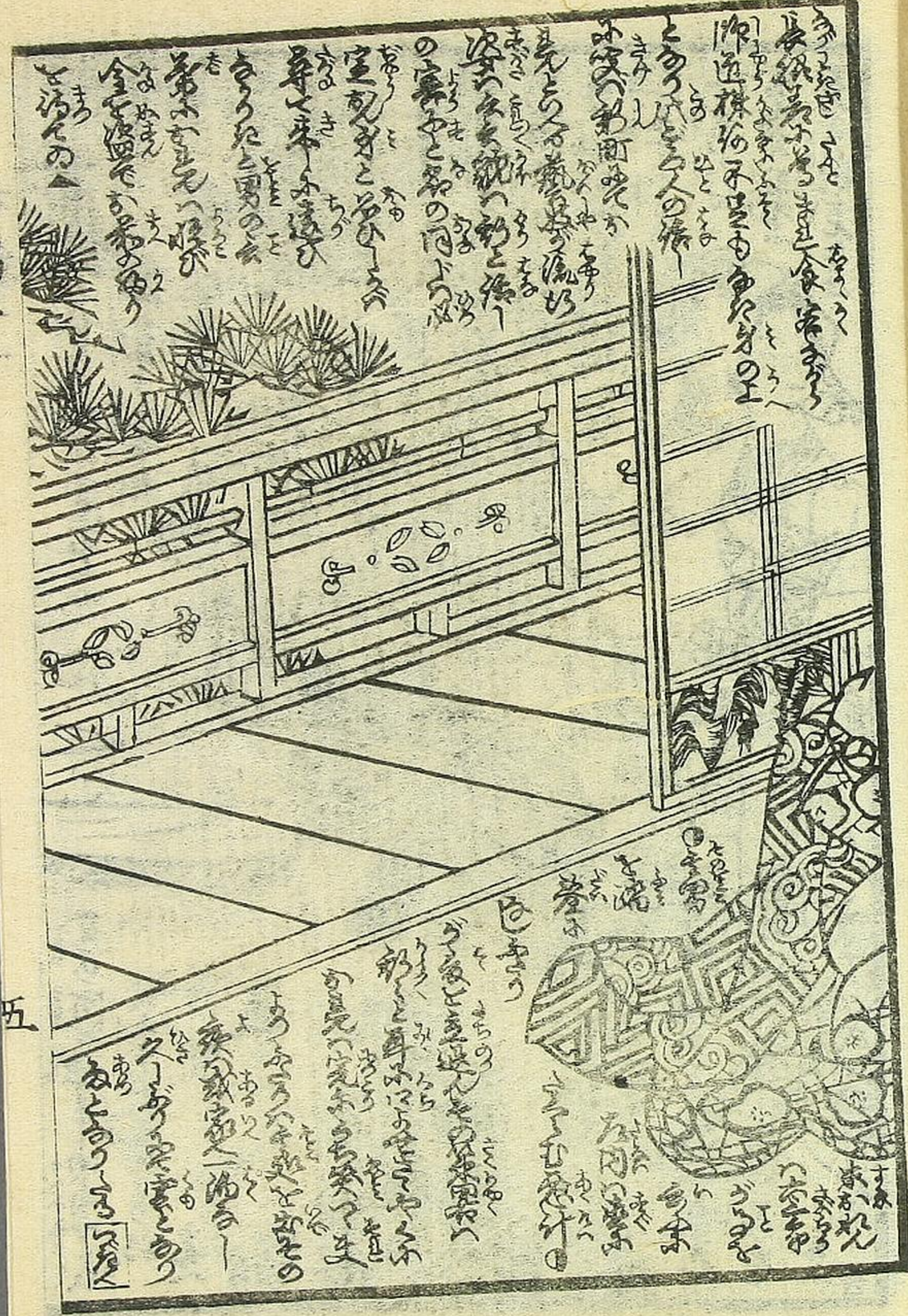
左  
 りくは  
 全を  
 みた内はまをひそ  
 めてふやうその  
 上は上座の下  
 ち通るを  
 きの者  
 ふつて



此の世に於ては、  
 一歩も歩みぬれば、  
 小を履き、大を履き、  
 履きぬれば、  
 此の世に於ては、  
 一歩も歩みぬれば、  
 小を履き、大を履き、  
 履きぬれば、

此の世に於ては、  
 一歩も歩みぬれば、  
 小を履き、大を履き、  
 履きぬれば、

此の世に於ては、  
 一歩も歩みぬれば、  
 小を履き、大を履き、  
 履きぬれば、



此の世に於ては、  
 一歩も歩みぬれば、  
 小を履き、大を履き、  
 履きぬれば、

此の世に於ては、  
 一歩も歩みぬれば、  
 小を履き、大を履き、  
 履きぬれば、

此の世に於ては、  
 一歩も歩みぬれば、  
 小を履き、大を履き、  
 履きぬれば、







桃しん肉の左内が  
 突如と夕雨の伸化の二弟の文と  
 左  
 水鏡正

本笑ひ互小...  
 全持り...  
 水...  
 比...  
 と...



斗の...  
 桃...  
 突如...

本笑ひ互小...  
 全持り...  
 水...  
 比...  
 と...



此の用は甚だ古くは同村の田舎  
 と云ふに其の昔の事は今も  
 村人もたゞ其の昔を懐念する  
 程の事なれば其の昔の事  
 程の事なれば其の昔の事  
 程の事なれば其の昔の事  
 程の事なれば其の昔の事

此の用は甚だ古くは同村の田舎  
 と云ふに其の昔の事は今も  
 村人もたゞ其の昔を懐念する  
 程の事なれば其の昔の事  
 程の事なれば其の昔の事  
 程の事なれば其の昔の事



此の用は甚だ古くは同村の田舎  
 と云ふに其の昔の事は今も  
 村人もたゞ其の昔を懐念する  
 程の事なれば其の昔の事  
 程の事なれば其の昔の事  
 程の事なれば其の昔の事

此の用は甚だ古くは同村の田舎  
 と云ふに其の昔の事は今も  
 村人もたゞ其の昔を懐念する  
 程の事なれば其の昔の事  
 程の事なれば其の昔の事  
 程の事なれば其の昔の事



鼻指のせきまもとの  
のちうの敷  
この指つて  
あつた  
きん  
きん  
めがねの伏  
せと代り  
たくのふと  
はてあまのふ  
野た備へ

その  
肉ふ  
ドリヤ腰  
びんのかた  
まふあつと  
まふあつと  
も侍人の敷と担  
かて現は  
す



つぎ振舞とさつせも果ては第がらまふ不審むの  
うらむ田家の一夜をいひ男はは悦ぶも  
流馬如物めら  
はてあまのふ  
野た備へ

水  
この水  
あつた  
きん  
きん  
めがねの伏  
せと代り  
たくのふと  
はてあまのふ  
野た備へ



官 朝鮮  
許 名法  
牛肉丸  
小包代十二五五厘  
小包代六五五厘

官 たんせき  
許 天泰丸  
一包代五五厘

此天泰丸と書身一たんせき。ぞん  
そく。らうまやう。あやぐはう人  
のやうめん。きやう。さんせん  
まんのせだ。小児百月せだ。花  
一切のせだ。月ひく功効速うあう  
薬。く。本。出。は。丸。い。

出板御届明治三十二年五月八日  
地本問屋 錦繪  
金松堂 出板人 辻岡支助





# 水鏡

## 陽田曜

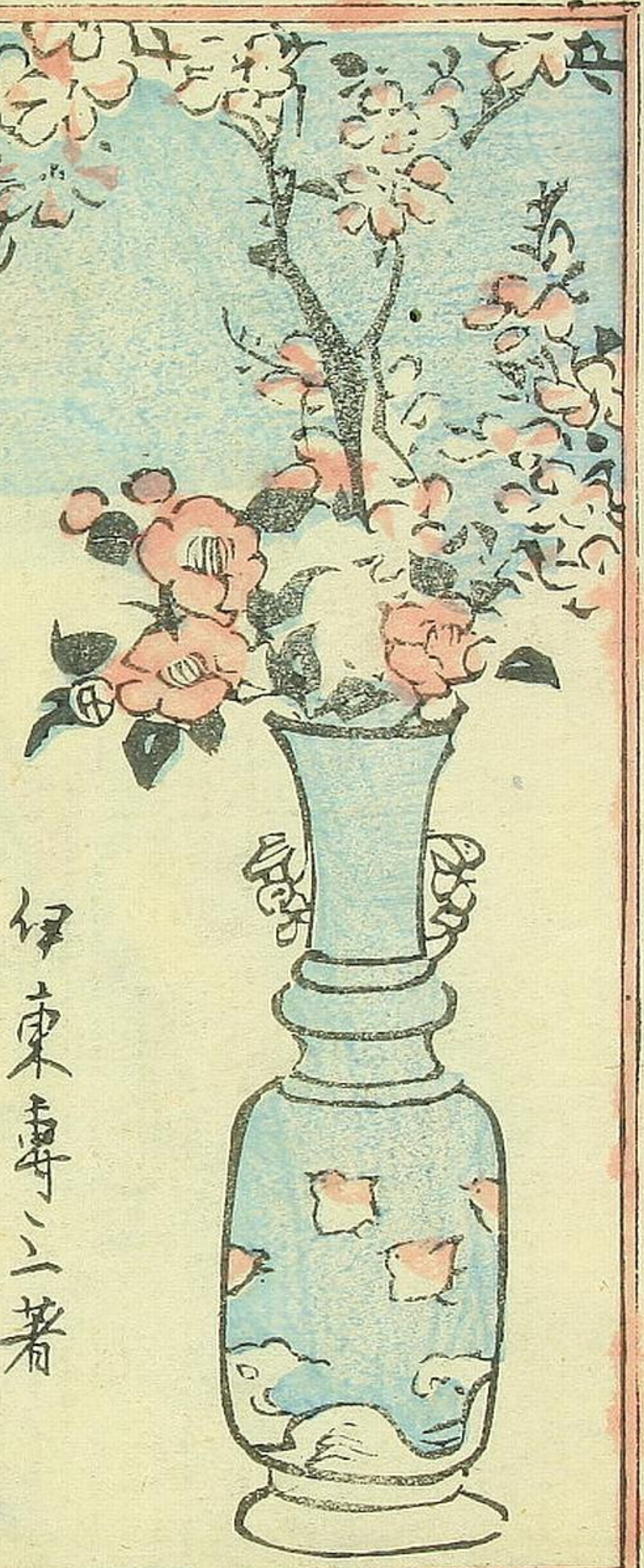
武海中之卷

金松堂梓

伊東專之著

前崎水鏡補遺

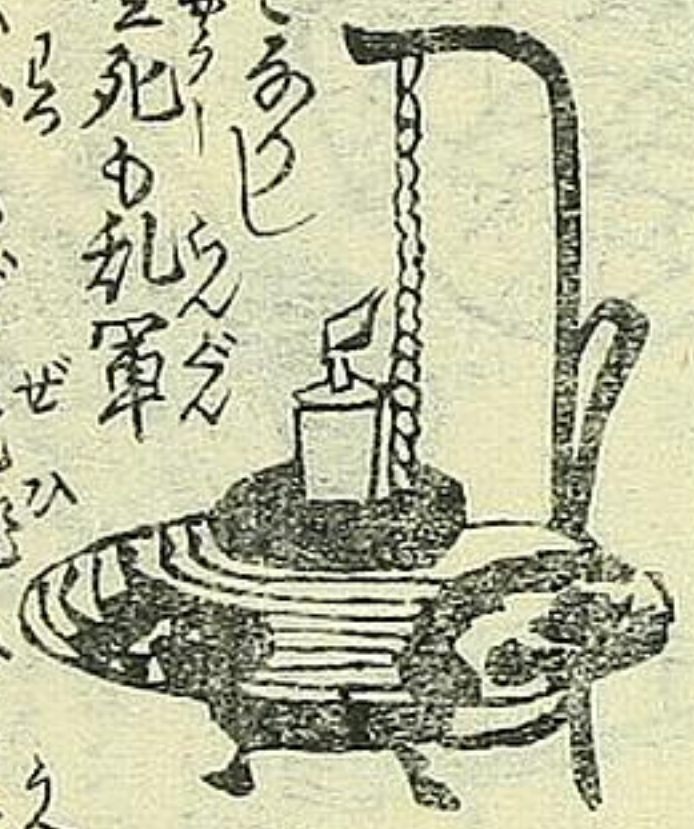
梅堂國政画



48-8/55

### 二編中の巻

二編中の巻 山岡健 湯が宅 ▲始生じふ文治と後へ無戦  
 ありてはまろが疾中みおるく ぬせが家と  
 滅りてを程えんやかゝ初り 身元敵一  
 海五ゆると毛髪に積まき かく大敗ゆとあじ  
 採一ふおんとせー起へかまろ 久文治の生死も乱軍  
 尼知ぬ武士と昔よゆり来る 各共更ふからぞ是非なくと煙と  
 一安んぬと直と不審へいやく 若とちのふらたぬ知ぬ山をう月  
 増のそありしう治平へ早も 盟の者と昔よ奥御命津へ入城は  
 水鏡をよそなりや、敵掃うと まゆの敵を引たし又と戦争よ  
 りふふふふ水鏡も治平のあふふ 利ありぬ起へ王改維新の時とあり  
 登たかまろ不安バ直くとる戦 天朝のを悪ふ身と後身へ  
 方の物屋う光を帯へ固り我も 附一かほ度物耐るせしふた本あへ  
 上野へ入りし翌月彼知し戦争の 幼く仔細と安く不備候との始末とを



水鏡二中

へぎつ



冬はよむと  
 よよと  
 冬はよむと  
 よよと  
 冬はよむと  
 よよと

冬はよむと  
 よよと  
 冬はよむと  
 よよと  
 冬はよむと  
 よよと

冬はよむと  
 よよと  
 冬はよむと  
 よよと  
 冬はよむと  
 よよと

冬はよむと  
 よよと  
 冬はよむと  
 よよと  
 冬はよむと  
 よよと



冬はよむと  
 よよと  
 冬はよむと  
 よよと  
 冬はよむと  
 よよと

冬はよむと  
 よよと  
 冬はよむと  
 よよと  
 冬はよむと  
 よよと

冬はよむと  
 よよと  
 冬はよむと  
 よよと  
 冬はよむと  
 よよと

冬はよむと  
 よよと  
 冬はよむと  
 よよと  
 冬はよむと  
 よよと

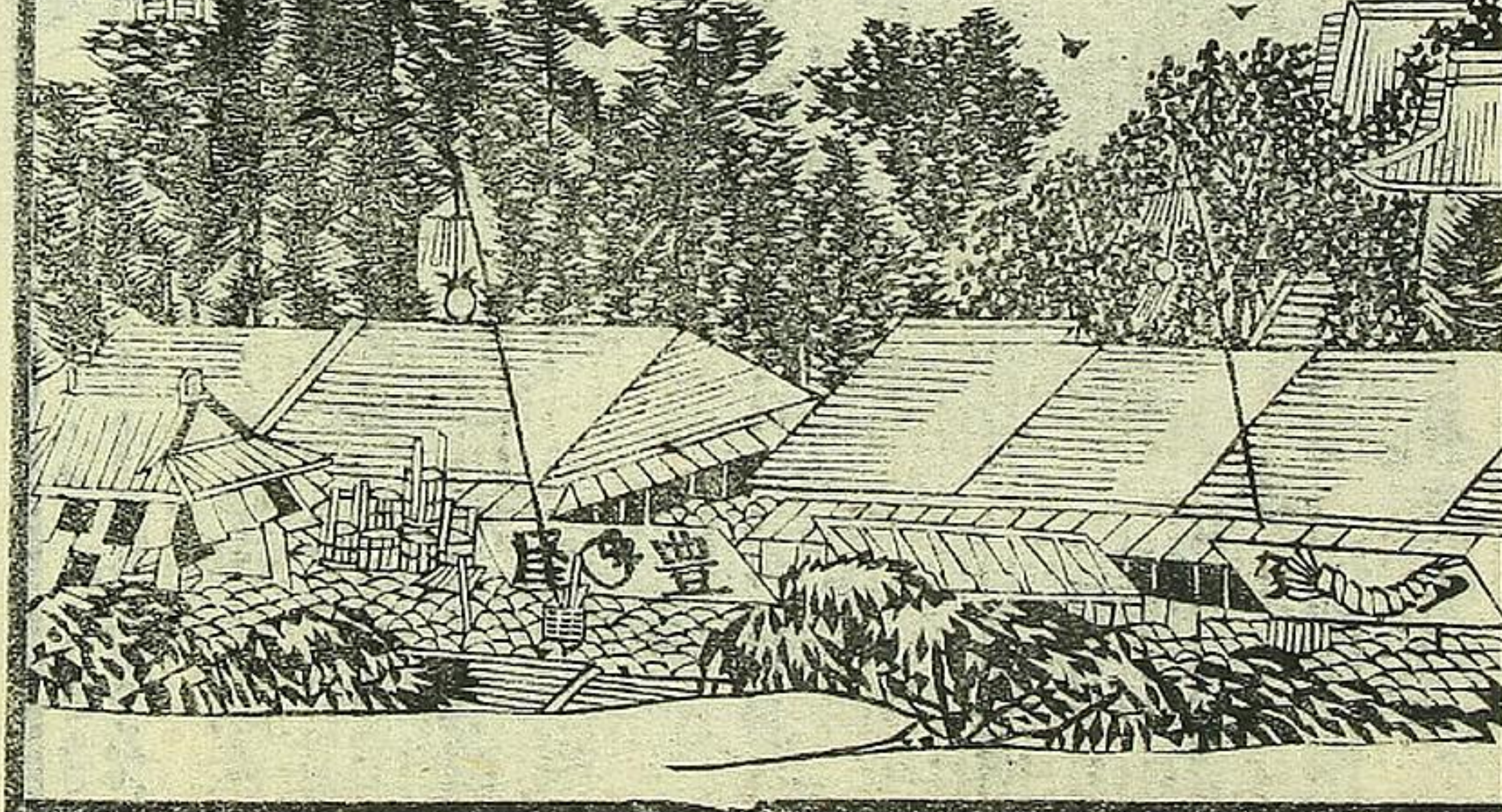


つぎ 向ふの方を眺めくと  
大衆とよるとは世人はと  
押寄つてきりしはけ方へ

巡幸するひつきの男のそと  
知るた蒼鷺合はつた肉の  
史とつとつたのもつたひ  
さる徳盛のグットつた  
懐中へ入ると入ると今奪  
ひと見えまゝなる紙入と  
つた紙をとり着る人らつた  
ひつきの男が侍へたつた  
一礼をとりつとつた

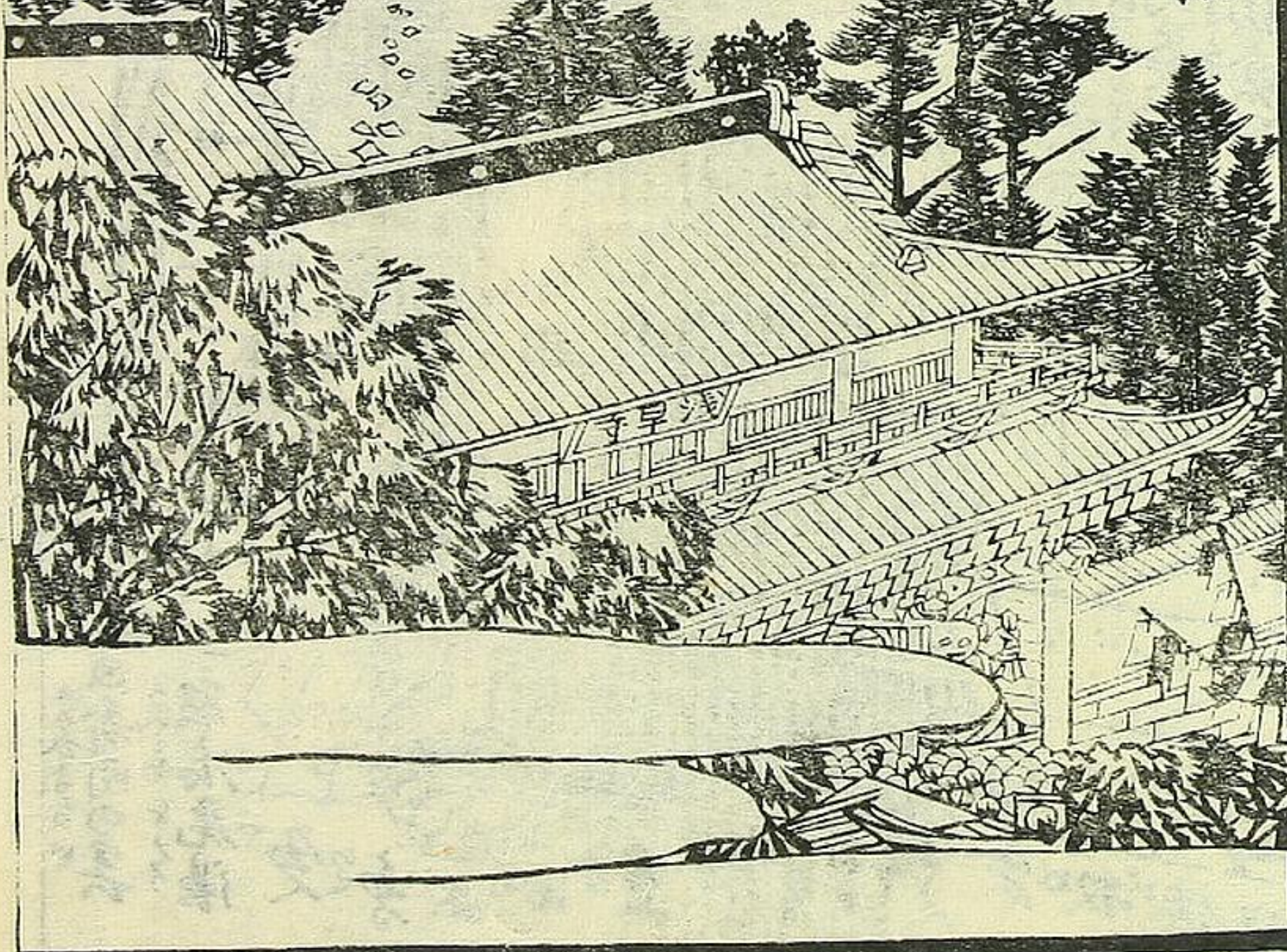
浅草観音年  
市廻景況

巡一とつたは一寸と一杯  
差上つた年をむきむき  
松とつた物とつた金の  
おとつた福らつた人  
ゆきはつたの松とつた  
ゆきとつたと思ひ  
あつたの空程も  
おとつたつたつた  
おとつたつたつた  
おとつたつたつた  
おとつたつたつた



おとつた紙入とつた  
返一とつたつたつた  
おとつたつたつた  
おとつたつたつた  
おとつたつたつた  
おとつたつたつた  
おとつたつたつた  
おとつたつたつた  
おとつたつたつた  
おとつたつたつた

おとつたつたつた  
おとつたつたつた  
おとつたつたつた  
おとつたつたつた  
おとつたつたつた  
おとつたつたつた  
おとつたつたつた  
おとつたつたつた  
おとつたつたつた  
おとつたつたつた



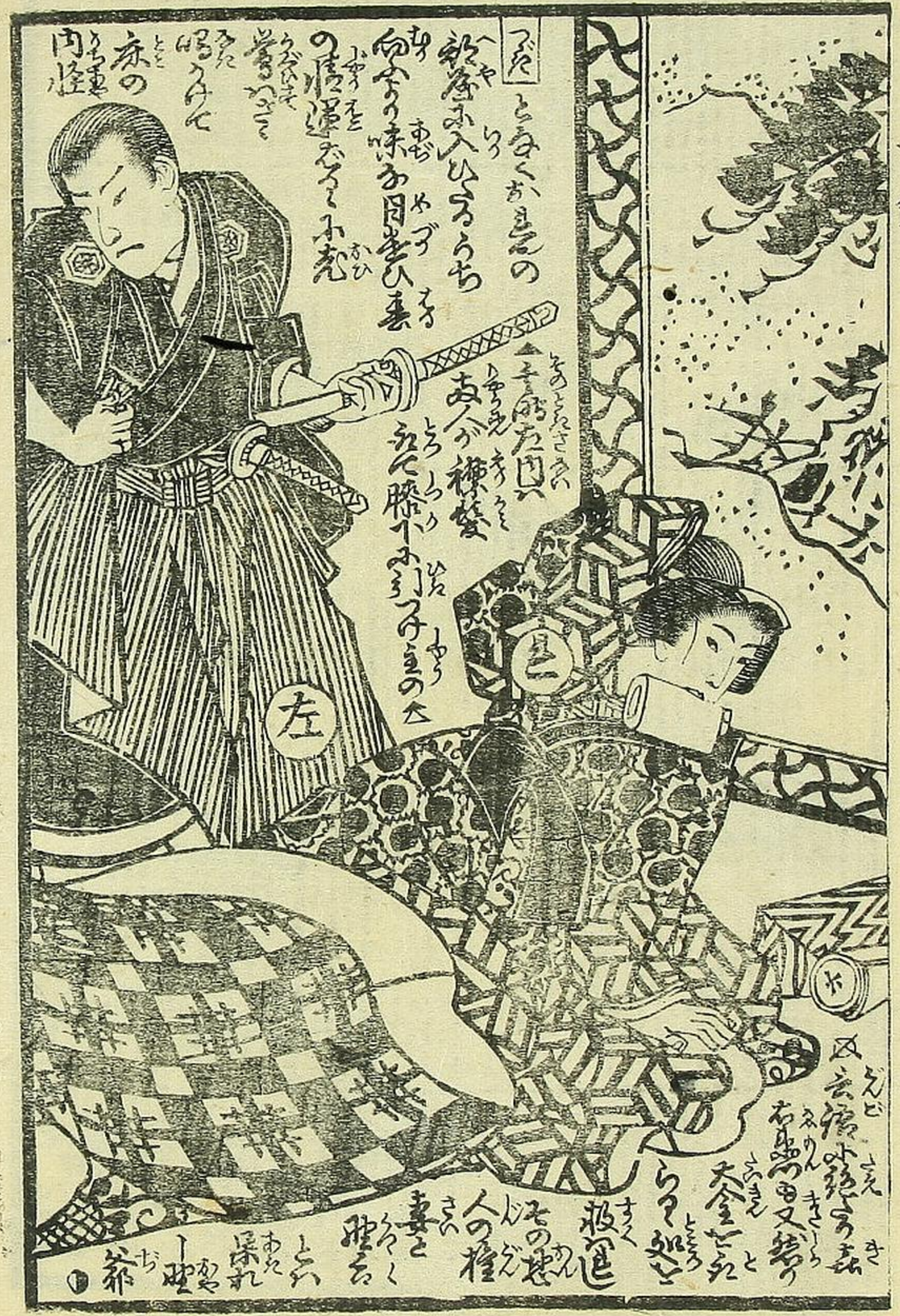




此の世に... 氣を奪はせし... 縁計... 最後... 此の世に... 縁計... 最後... 此の世に... 縁計... 最後...

つき... 流る... 殊... みる... 泥... 為... 焼... 下... 小... 花... みる... の...





夫の如き者も  
 世に少くなく  
 今更らざる  
 夫の如き者も  
 世に少くなく  
 今更らざる  
 夫の如き者も  
 世に少くなく  
 今更らざる

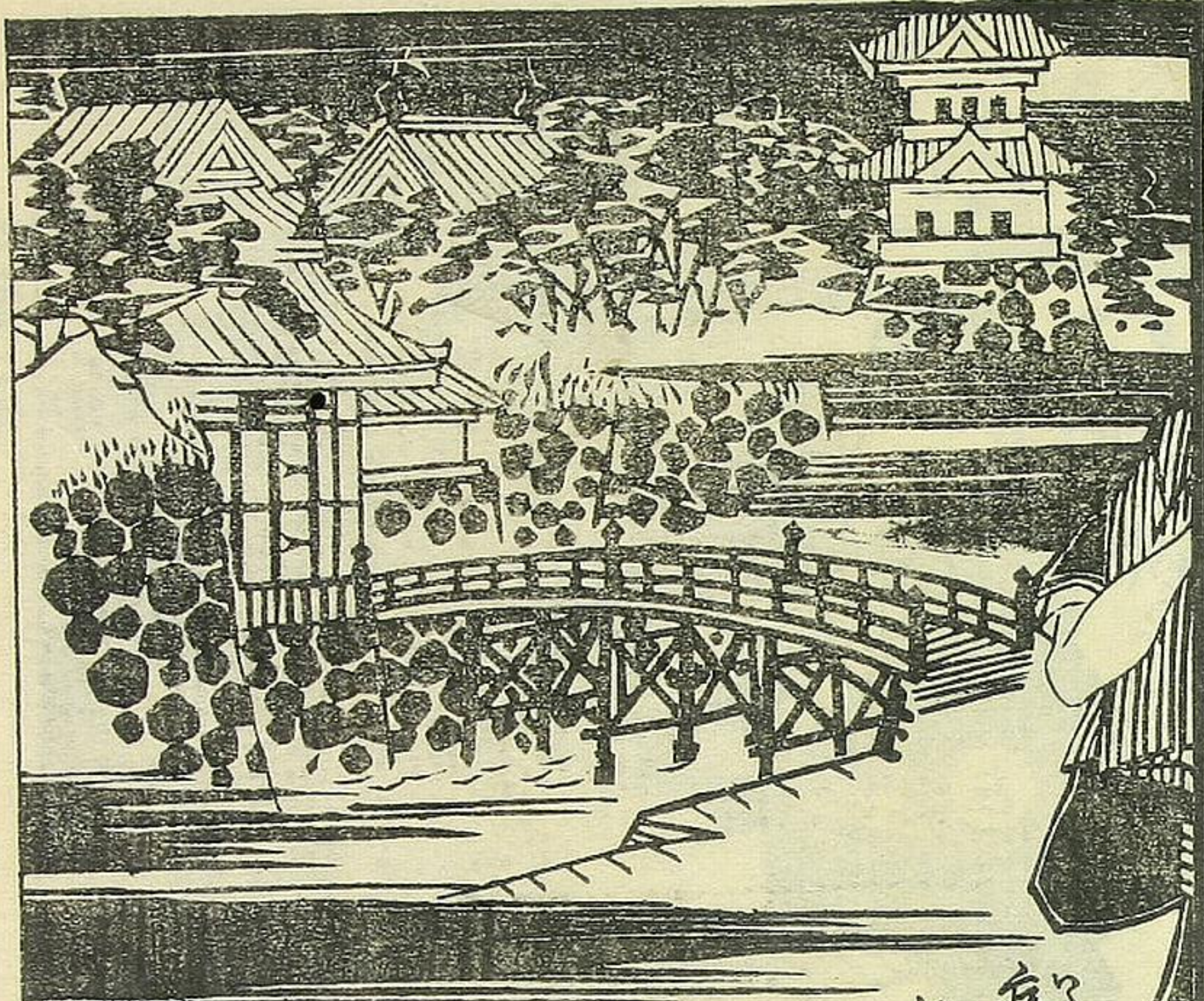


夫の如き者も  
 世に少くなく  
 今更らざる



夫の如き者も  
 世に少くなく  
 今更らざる

夫の如き者も  
 世に少くなく  
 今更らざる



痛い位に紙漫と一紙一寸三田といふ  
 佐のり「まもふらむをばびのむらり  
 アノ所希ふ由旅意のつと小亭を  
 佐もも陸よ身りのとら思ひぬ  
 真夜中の茶店も眠り寝込ま入  
 在絶ておまが安んといふらうが  
 ぬらるるより端を附け来るひと  
 りの男が足えがらまはばくとも  
 知らざるだ紙の方より紙の  
 お侯「このちちちあいの起へ  
 びてかお」已に検見川小色  
 がらるらうら帯らくまは木



左  
 右  
 山寺の鐘午お二階を  
 夕とと  
 湯らる

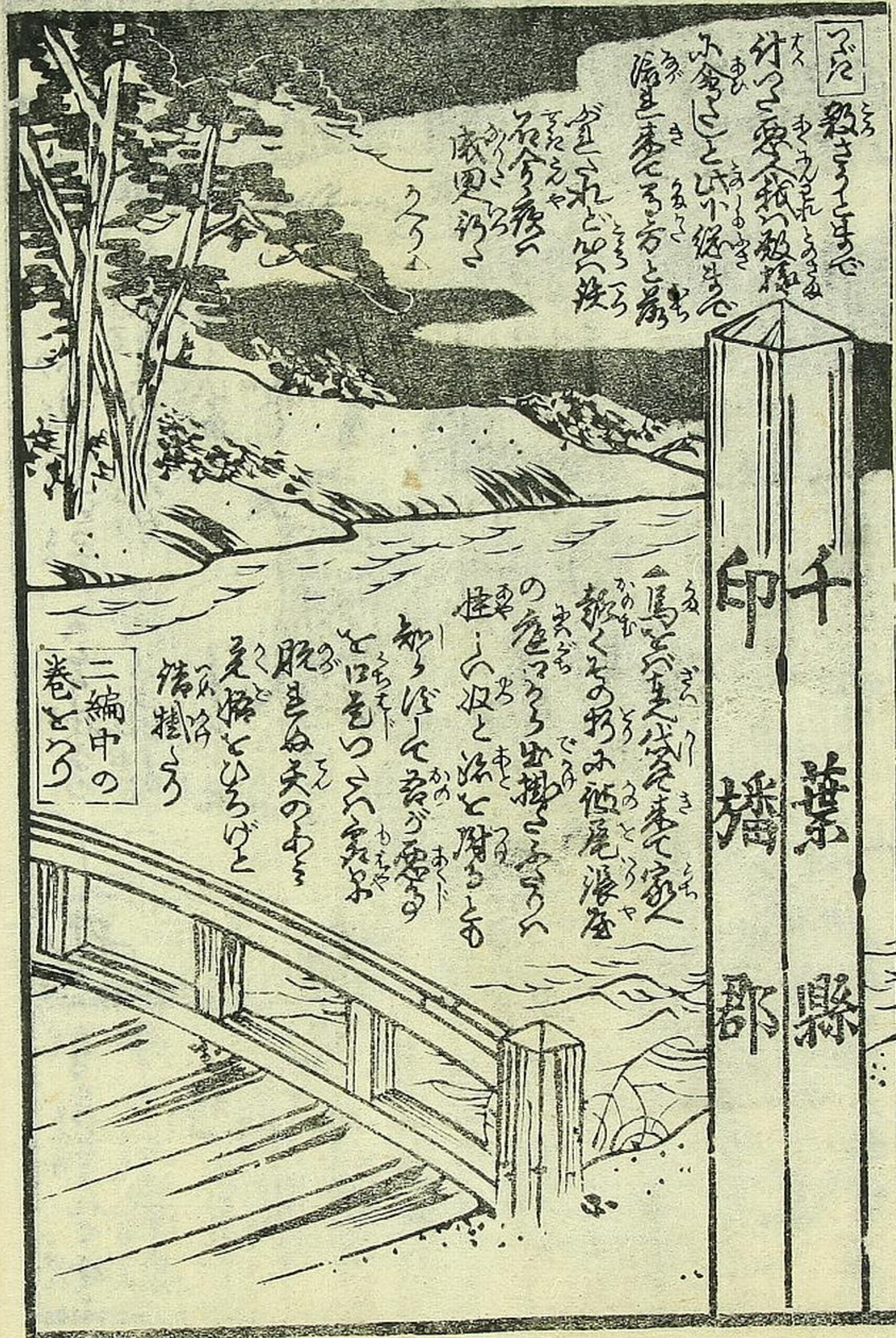
連ねくあり  
 と刀の  
 小櫓を  
 ちた

山寺の鐘午お二階を  
 夕とと  
 湯らる



水鏡三冊

千葉縣 印播部



銅版開化玉編

全

島田豊三郎編  
開化女用文章

全

近世紀聞

初編ヨリ  
十編迄出版  
以下追々發兌

芳川後雄編  
夜嵐阿鬼奴花仇夢

五編  
大尾

義烈回天百首全

魯文作  
金花七變化

三十一編マデ  
出版  
追々出版

高橋阿傳夜叉譚

秀賀作  
濡衣女鳴神

十編  
大尾

全地本問屋  
錦繪問屋

金松堂

出版入辻岡文助

出版 御届明治十三年五月八日

淺草花川戸一番地  
伊東彦三郎方同居

編輯人 伊東 專

日本橋區横山町三丁目二番地

010190511001







梅堂國政画

尾田彫秀

金松堂梓

下



10

15

20

25

30



伊東 宗之助 著  
 大崎 和 撰  
 福 澤 諭 著  
 海 中 新 考  
 物 考 國 漢 通

48-8153



二編下の巻 其の四  
 文治ハヤット表と掛け突を推小  
 腹後と打也  
 左内ハ  
 左ノ  
 左ノ  
 左ノ

水島二下

中務の沼ふ際三重の  
 雅丹  
 雅丹の沼ふ際三重の  
 池とた内へ流し  
 知る福と文治の  
 後ほど飛入ると  
 沼と取つてさる  
 ろふふお見へおと  
 るらふらふ由コリヤ  
 叶ぬと目教  
 白ふの山の

だらくくは東面あり  
 樹皮の西の山あり  
 のたつて  
 全派の光樹  
 枝と交へ種  
 の名を

あつた本  
 藤きて




の後  
 二生  
 親命  
 逃上  
 ろとヤワカ  
 びぬも  
 取ま  
 ほ  
 と文治も  
 後つて遊て  
 行くは沼ふ  
 春の南面

池とた内へ流し  
 知る福と文治の  
 後ほど飛入ると  
 沼と取つてさる  
 ろふふお見へおと  
 るらふらふ由コリヤ  
 叶ぬと目教  
 白ふの山の

だらくくは東面あり  
 樹皮の西の山あり  
 のたつて  
 全派の光樹  
 枝と交へ種  
 の名を

あつた本  
 藤きて

池とた内へ流し  
 知る福と文治の  
 後ほど飛入ると  
 沼と取つてさる  
 ろふふお見へおと  
 るらふらふ由コリヤ  
 叶ぬと目教  
 白ふの山の





大乗



薩摩の懐はう中入の  
 ひら懐えら  
 一はが「ま」危  
 険知であつが  
 私をよみ合とのいふおちの  
 伝人がをのこあ不動  
 極がも救ひ  
 さまつて下  
 されこのを  
 らうの懐の「ま」  
 一はが「ま」危  
 険知であつが  
 私をよみ合とのいふおちの  
 伝人がをのこあ不動



是れ  
 見が  
 急募  
 是れ  
 見が  
 急募

関はねのまねにうらせ  
 ぐまはねのまねにうらせ  
 今度中層早明と  
 夜はよむ雁舟と  
 まてはねのまねにうらせ  
 まてはねのまねにうらせ  
 まてはねのまねにうらせ  
 まてはねのまねにうらせ

一はが「ま」危  
 険知であつが  
 私をよみ合とのいふおちの  
 伝人がをのこあ不動

ふぎ 糸と拵の

不動 極の

糸結と一皆きてまきや

まきやとまきを扇は

成田の方へと運びぬ

念をもちたすころ後の

而くと羽渡れは渦を昇る

松竹梅のついでに

まきと糸をもちまき成田へ

ふ門糸の海老糸といふ宿糸

つた糸も糸の草川と体もある

まきと糸をもち水糸をもち



と備わらるる糸も

あまのついで

まげの糸

一ふた九と

海中の

空宿の

一人

である

ついでに

夜の糸

の糸

門糸の

糸も糸の

糸も糸の

糸も糸の

糸も糸の

糸も糸の

成田宿山

信心講

八大講

醜十六講



糸も糸の

糸も糸の

糸も糸の

糸も糸の

糸も糸の

糸も糸の

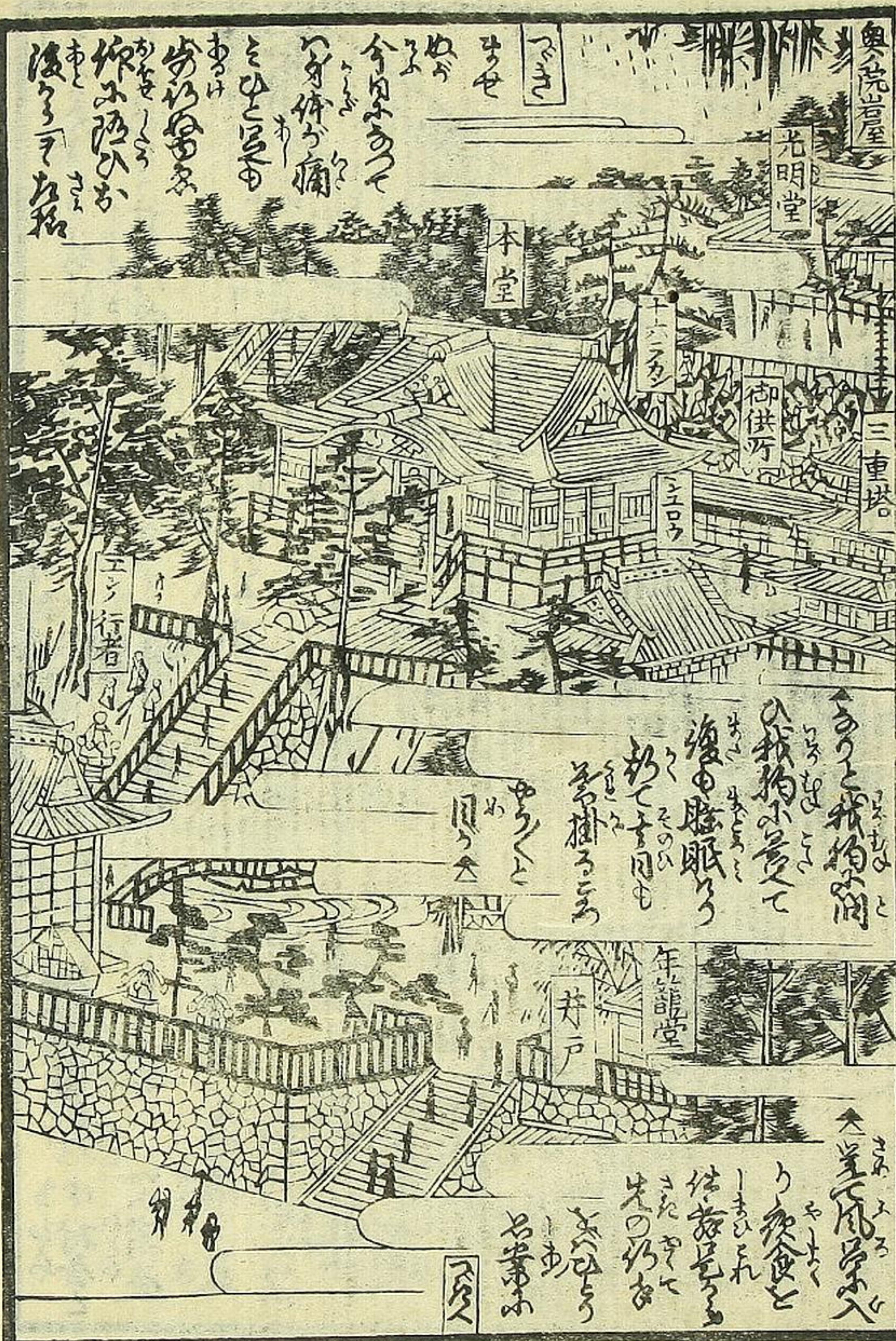
糸も糸の

糸も糸の

糸も糸の

糸も糸の

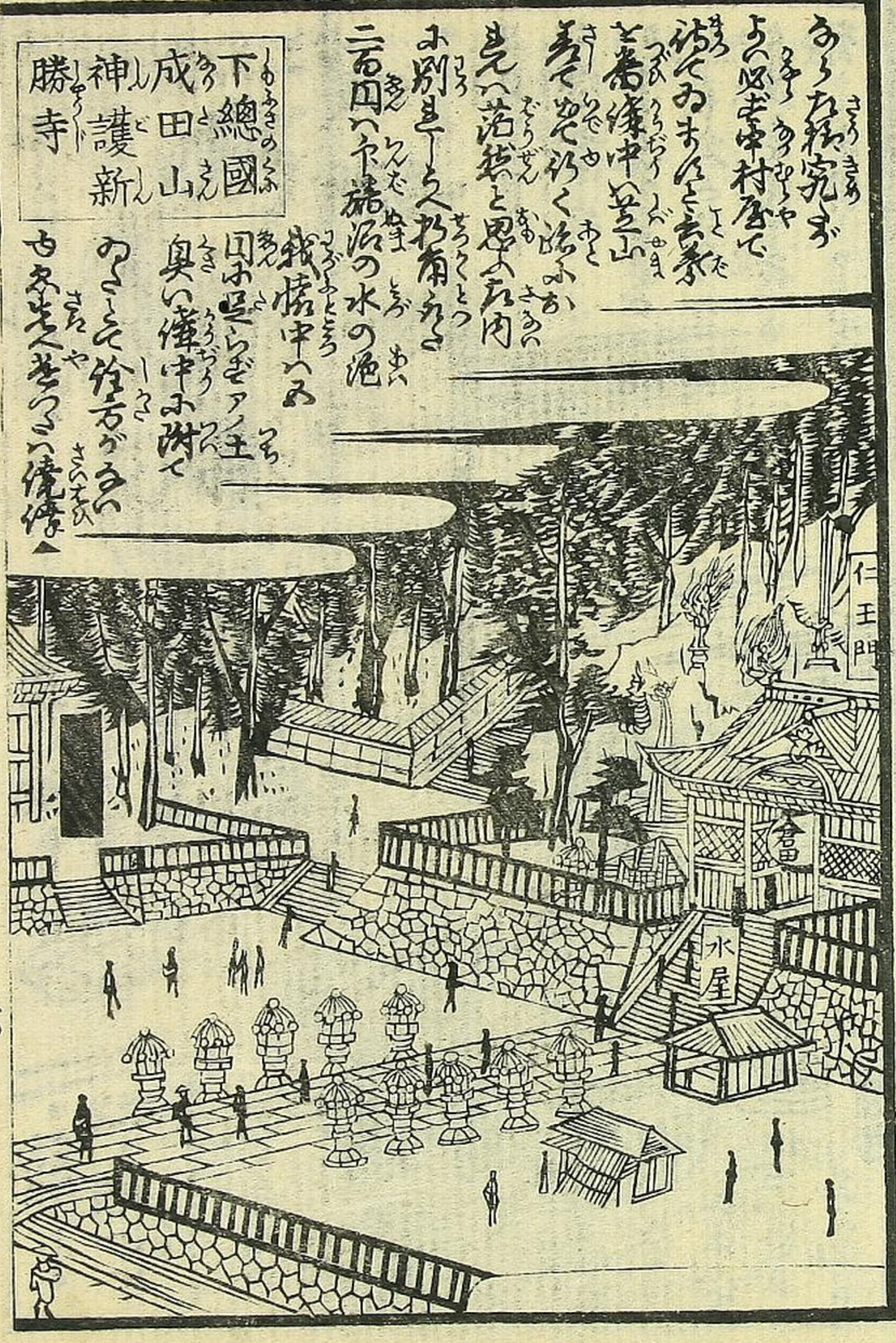
糸も糸の



あつた極楽を  
ぶの必事申村をて  
訪ておまのまを  
とも縁中(ま)山  
美を宛りく治ふか  
先ハ落葉と思ふ内  
小別且一久折南か  
二石田ハ不流派の水の池

あつた極楽を  
ぶの必事申村をて  
訪ておまのまを  
とも縁中(ま)山  
美を宛りく治ふか  
先ハ落葉と思ふ内  
小別且一久折南か  
二石田ハ不流派の水の池

あつた極楽を  
ぶの必事申村をて  
訪ておまのまを  
とも縁中(ま)山  
美を宛りく治ふか  
先ハ落葉と思ふ内  
小別且一久折南か  
二石田ハ不流派の水の池



あつた極楽を  
ぶの必事申村をて  
訪ておまのまを  
とも縁中(ま)山  
美を宛りく治ふか  
先ハ落葉と思ふ内  
小別且一久折南か  
二石田ハ不流派の水の池

あつた極楽を  
ぶの必事申村をて  
訪ておまのまを  
とも縁中(ま)山  
美を宛りく治ふか  
先ハ落葉と思ふ内  
小別且一久折南か  
二石田ハ不流派の水の池

あつた極楽を  
ぶの必事申村をて  
訪ておまのまを  
とも縁中(ま)山  
美を宛りく治ふか  
先ハ落葉と思ふ内  
小別且一久折南か  
二石田ハ不流派の水の池







久々 かねてと久々  
「此の世に初め  
計りなきは  
氷柱の文治小舟  
向ひは積米と  
おぼつかな  
減更敷く遠中  
確舟小舟にて  
多くとるま  
同との相船のみ  
舟の波の生所と  
舟に互ふ様  
舟の波の生所と  
舟に互ふ様  
舟の波の生所と  
舟に互ふ様



舟の波の生所と  
舟に互ふ様  
舟の波の生所と  
舟に互ふ様  
舟の波の生所と  
舟に互ふ様  
舟の波の生所と  
舟に互ふ様  
舟の波の生所と  
舟に互ふ様  
舟の波の生所と  
舟に互ふ様  
舟の波の生所と  
舟に互ふ様  
舟の波の生所と  
舟に互ふ様

且文治の年  
上世の相船のみ  
舟の波の生所と  
舟に互ふ様  
舟の波の生所と  
舟に互ふ様  
舟の波の生所と  
舟に互ふ様  
舟の波の生所と  
舟に互ふ様  
舟の波の生所と  
舟に互ふ様  
舟の波の生所と  
舟に互ふ様  
舟の波の生所と  
舟に互ふ様



舟の波の生所と  
舟に互ふ様  
舟の波の生所と  
舟に互ふ様  
舟の波の生所と  
舟に互ふ様  
舟の波の生所と  
舟に互ふ様  
舟の波の生所と  
舟に互ふ様  
舟の波の生所と  
舟に互ふ様  
舟の波の生所と  
舟に互ふ様  
舟の波の生所と  
舟に互ふ様

く島二

つぎの番も願え  
合せは思つた  
うかつ水産保存  
うかつ文後の番も願え

金を痛む  
金を痛む

左内の死骸

其の男の物も一箱あり

左

二篇  
下の巻

三篇  
下の巻

左

右

左

右

左

右

左

右

官 朝鮮  
**牛肉丸**  
大包代二十五丸  
中包代十二丸五厘  
小包代六丸五厘  
許 名法

官 たんせき  
**天泰丸**  
一包代六丸五厘  
許 名法

けしん男女のけしんはけしんはけしん  
けしんはけしんはけしんはけしん  
けしんはけしんはけしんはけしん  
けしんはけしんはけしんはけしん  
けしんはけしんはけしんはけしん  
けしんはけしんはけしんはけしん  
けしんはけしんはけしんはけしん  
けしんはけしんはけしんはけしん  
けしんはけしんはけしんはけしん  
けしんはけしんはけしんはけしん

出板御届明治三十二年五月八日  
地本問屋  
錦繪  
金松堂  
出板人 辻岡文助



水錦みづのあじき  
隅田曙まよのあひらの

第貳篇

伊東專三著  
前嶋和橋補綴  
梅堂國政畫

金松堂壽梓

